



TITLE:

資料14 頬嚢を構成する表情筋に関する比較形態学的研究(VI 共同利用研究 2.研究成果)

AUTHOR(S):

島田, 和幸; 伊藤, 純治

CITATION:

島田, 和幸 ...[et al]. 資料14 頬嚢を構成する表情筋に関する比較形態学的研究(VI 共同利用研究 2.研究成果). 霊長類研究所年報 1996, 26: 118-118

ISSUE DATE:

1996-11-01

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/164754>

RIGHT:

資料13

霊長類における口蓋の観察

重政香代子 (日本大・歯・解剖1)

ヒト口蓋において、軟口蓋と硬口蓋の移行部付近の口蓋縫線の両側に小さな窪み(いわゆる口蓋小窩、以下小窩と略す)がおおよそ50%に認められる。小窩には口蓋腺の導管が開口するとされるが、詳細な報告はみあたらない。本研究では、ヒトおよび霊長類において小窩の存在の有無を調査し、小窩が存在する例においてはその部における口蓋腺の開口状態を組織学的に観察し、ヒトと霊長類の口蓋腺の形状を比較検討することとした。材料はホルマリン固定の、ヒト頭頸部標本34例およびニホンザル頭部標本9例から得た。ヒトでは小窩が認められたのは13例、38.2%で、左右とも正中線から外側方約1~2mmで、口蓋骨水平板後縁より前方約1mmに位置していた。小窩はやや後上方に向かって窪んでおり、直径約2~3mm、深さ約1~4mmであった。小窩の形態が著明な例を、HE染色切片上で観察すると、口蓋腺が固有層と粘膜下組織の間に分布し、これから導管が粘膜上皮に向かって走行していたが、この中でも最も太い導管が小窩に開口していた。このことから小窩は主として口蓋腺の導管の開口部に相当すると考えられる。ニホンザルは3例、33.3%において口蓋にわずかな窪みが観察された。窪みはヒトと同様に左右とも正中線から外側方約1mmにあったが、口蓋骨水平板後縁よりも後方約4mmの軟口蓋に位置していたことがヒトと異なる。窪みが最も著明なものをHE染色切片上で観察すると、ヒトよりも口蓋腺の発達は劣るが、かなり太い導管が窪みに向かって開口していた。

資料14

頬嚢を構成する表情筋に関する比較形

態学的研究 島田和幸, 伊藤純治 (昭和大・医・第2解剖)

霊長類表情筋における顔面神経と三叉神経の末梢での交通枝の観察中において、表情筋、特に頬嚢周辺の表情筋の筋層構成や筋線維の走行にかなりの個体差が認められた。この点に関して今までに頬嚢を有するサルとしてニホンザル、アカゲザルについて観察を行った。しかし、マカク属以外のオナガザル亜科のサルも頬嚢を有するが、この部位の表情筋の筋構築に関する明確な記載が少ない。従って表情筋の筋構築を明らかにし、比較検討することが頬嚢の機能解明に必要である。そこで、今回ヒヒ(マントヒヒ、アヌビスヒヒ)について、ヒトの表情筋観察と同様の古典的な解剖剖出方法によって、頬嚢周囲の表情筋の筋構築を観察した。ヒヒの頬嚢部から口角部にかけての表情筋の構成では、表層は比較的良く発達した広頭筋で被われていた。深層は口角部では口輪筋、口角下制筋の筋層が交錯し、複雑な形状を示していた。頬嚢部では頬筋が頬嚢を挟むように上部筋層と下部筋層に2分しており、下部筋層は嚢状を呈していた。これらの形状はニホンザル、アカゲザルでも同様であったが、口角部の筋層はヒヒの方がより明瞭であった。さらに他の頬嚢を有するサルの表情筋の比較や、頬嚢自体の形態観察により、頬嚢の機能的特徴が明らかになると考える。